

「教員研究報告」

報告 1：秋元 樹（社会事業研究所特任教授・アジア福祉創造センター長）

「アジア福祉創造センター共同研究 ソーシャルワーク発展の第3ステージ

報告 2：今井 幸充（専門職大学院教授）

「認知症者の生活支援に必要な「介護の手間」判定指標とは

～平成22年、23年度老人保健事業推進等補助金事業から～



アジア福祉創造センター共同研究 ソーシャルワーク発展の第3ステージ

秋 元 樹

古屋 教員研究報告の第1題目は、本学の社会事業研究所の特任教授であり、アジア福祉創造センター長の秋元樹先生にお願いしています。題目は、「アジア福祉創造センター共同研究ーソーシャルワーク発展の第3ステージ」です。

ご存じかと思いますが、秋元先生は、アジア太平洋地域ソーシャルワーク教育連盟（APASWE）の会長でもあります。グローバルな視点からソーシャルワークの現在について、いろいろと示唆に富む報告をいただけたと思います。秋元先生、よろしくお願いします。

秋元 おはようございます。よろしくお願いします。本学には、アジア福祉創造センターという、ちょっと変わった名前の建物があります。2007年より前に卒業した皆さんには、なじみがないと思いますが、この5、6年の新しいものです。

このセンターは、もともとは2階建てというか、1階建てというか、図1の「すべての大学が共通に行う国際化、国際活動」と書かれたところまでの建物で、学生のほかの国との交流、先生方の共同研究、環太平洋セミナー、国際会議その他、

外とかかわるいろいろな活動をしてきました。ただし、この部分は、本学に限らず、どこの大学でもやっていて、かつ、やらざるを得ない、サボるわけにはいかない分野です。

本学は、恐らく、この部分についてはほかの大学に比べて負けない、誇りを持っていいレベルの国際化の活動をしていたと思います。2年前に建て増しをして、それをこの上に加えました。

加えた部分は、ちょっと変わっています。各大



図1 アジア福祉創造センターという建物

学と同じように、この大学も、頑張って国際化を進め、国際活動をし、先生や学生の国際的研究を進めています。それに加えて、税金が入っていることもあるかもしれませんが、天下の（日本）社会事業大学なのですから、ほかの私立とは違い、わが大学のことだけをちまちまと考えるのではなく、もっと大きいことを考えよう。

そして、ここの部分は、国際に関して、アジアに関して、また日本全体に関して社会福祉あるいはソーシャルワークの前進のために働こう。この上の部分は、けちなことを言わないで、本学の益になるかどうか、時には日本の益になるかどうかもさて置き、世界のソーシャルワークの前進のために、アジアのソーシャルワークの前進のために貢献できないかということで、建て増しをしました。


ここ（図1左欄  上から三つめ）に「校益」と書いてありますが、新しい部分は、この大学のためになるかならないかは、さしあたり横に置いて、もう少し大きいことを考えよう、前に行こうということです。

図1の1階部分は、ほかの大学もみんな頑張って競争していますが、この上の二つをまねすることは、日本に百いくつあるほかの大学の社会福祉でも、そうたやすいことではありません。誇りに思って進めば、恐らく、この部分における日本の大学間の競争は、もはや勝負ありです。本学が誇っていることだと思います。

結局、アジア福祉創造センターは何をやっているかということ、アジアの人々の福祉を実現するために、理論研究アプローチをやろう、まさに創造していこうということが大前提です。また、先ほどの図の2、3階（公共財、国際財）部分ですが、世界、特にアジアとの実践、理論上の交流を進めて、日本の大学コミュニティのハブとなろうと。さらに、そういうことも横に置いて、アジア・世界のソーシャルワークの発展にも貢献をしたい。

2階部分の例を挙げれば、大橋謙策前学長は、学会の会長だったこともありますし、日本社会福祉教育学校連盟の会長も務めました。そのあとの

高橋重宏先生も同じです。

3階部分「アジア・世界のソーシャルワークの発展への貢献」は、先ほど紹介していただきましたが、私は、世界のソーシャルワークの大学の連合会の副会長、アジアの会長をやっています。そういうことを、この大学としてやらせてくれます。それは大変大きなことだと思います。

ただし、この建物は、本当はまだありません。見たことがないのは当たり前です。こういう見た目にも味のある建物は、アメリカの大学のキャンパスに行けば大体あると思いますが、残念ながら、この大学にはまだ見えません。でも、C棟の3階に、これの卵が今あります。将来伸びることを期待しています。そういうところで、今歩み始めたところです。

学生の皆さんも、どうぞ利用してください。先生方や先輩方を踏み台にして、アジアに、世界に羽ばたいてもらえたら本望です。

コマーシャルはここまでで、本論に入ります。

本日は、このセンターでやっているいろいろなことのメインの一つである国際共同研究を紹介します。こんなに面白いことをやっているという話をします。本年度の大テーマ、横断幕は、ここに書いてある「ソーシャルワーク発展の第3ステージ」です。

これは何か。一年生とか二年生の学部の方も既に学んだかもしれませんが、ソーシャルワークは、言うまでもなく、ヨーロッパで始まりました。それは、いろいろなコンフリクトもありましたが、北米に渡り、アメリカを中心に花を開いて、今のようすばらしいものに育ちました。

ここまではいいですが、実は、今、このソーシャルワークを世界のものにしよう、あるいは、もはやグローバルプロフェッションであるという声の世界中に出ています。この第三段階、グローバルイゼーションのもとで、ソーシャルワークがもう一つ先へ行く、つまり、世界全体のものになるというのが今の段階です。

世界のものになるとか、すべきだとか、もうなっているとか言いますが、事はそう簡単にはいきま

せん。最近の世界のソーシャルワークが達成した一番の誇りは、恐らく、国際定義を作ったこと、倫理のステートメントを作ったこと、そして、教育訓練のグローバルスタンダードを作ったことです。恐らく、この辺りが最大の貢献だったと思います。

世界でそういう基準を作ったから、それを地球の隅々まで広げれば、すなわち‘disseminate’すればいいのかという問題です。私たちあるいは学生は、一ここにお顔を拝見しますが一、授業では、恐らく、この定義を教えられると思います。先生は、その教科書を使って教えると思います。でも、これでいいのか。つまり、セカンドステージまでだったらいいでしょうけれども、これが世界のものになるのかということです。

ソーシャルワークは、言うまでもなく、人々の生活に根差し、その問題や、困難や、生活ニーズや、社会問題等々に取り組んでいくものだと私は思います。そうである以上、ソーシャルワークは、それぞれの社会の、生活の、人々の問題やニーズ等々に根差し、その上に、その対応として生まれてきているものです。

ということは、論理必然的に、今あるソーシャルワークは、当然、ヨーロッパの生活に根差し、問題に根差し、その努力に根差しでできてきています。次いで、アメリカのそれが加わってできあがっているものであることは間違いありません。

今までは、それでよかったのです。しかし、それを世界のものにしよう、アジアのものにしよう、アフリカのものにしよう、ラテンアメリカのものにしようといったときに、それを広めればいいのかという問いです。

そうではありません。世界のソーシャルワークができあがるためには、今あるソーシャルワークがよって立たなかったような社会の生活問題、課題、ニーズ、社会問題等からのくみ上げの上に、なお加わった努力でなければ、世界のものになるはずはありません。‘enrichment’ー 吸収し、より豊かなものにしなければいけません。「今あるソーシャルワークを蹴っ飛ばせ」と言っているわ

けでは必ずしもありません。しかし、次のステージに行くには、次の努力が必要です。

それでは、そういう世界のソーシャルワークとは、どんなものになるのか。まだ授業では教えてくれません。私たちにはわかりません。しかし、次のソーシャルワーク、世界のソーシャルワークとはどういうものか、あるいは、どういうものでなければならないかという議論です。

ただ、世界のソーシャルワーク、第三世代を考えようといっても、そんなばかでかいことがそんな簡単にわかるはずがありません。オペレーションライズしようというわけではありませんが、もう少し検証ができるようなかたちか、もう少しスタンジブルなかたちに落とし込もうという努力が今始まっています。

このアジア福祉創造センターでは、本年度は、三つの努力を始めつつあります。

一つ目は、「仏教とソーシャルワーク」というテーマです。ベトナムからの誘いでもありました。

二つ目は、「ファンクショナル・オルタナティブ・リサーチ」です。あまりいい名前ではありませんが、訳しようがありません。ファンクショナル・オルタナティブは、社会学辞典だと「機能的選択項」です。「機能代替」「機能的等価」(ファンクショナル・イクエヴァラント)の方がいいかもしれません。

例えば、あまりいい例ではありませんが、ものを食べるときに、胃を取っても腸で食べられます。要するに、あることをするのに、いくつかの選択があるかもしれません。あるいは、ある機能は「A」がないときには、当然、「B」がやるということです。

ラオス、スリランカ、フィジーを手はじめとして、この調査研究をやり始めつつあります。

しかし、やると言ったら、アジア中と言ったらおおげさですが、次から次へ、「私のところも、俺のところも入れろ」という希望が出てきていて、予算もないところでどこまでいい研究にまとめられるか、今、うれしい苦しみをしているところです。始まりつつあるところです。

三つ目は、アジアのソーシャルワーク教育が欧米からどういう影響を受けてきたのか、あるいは、自分たちで育ってきたのかという、もっとダイレクトな研究です。

前々年、世界のソーシャルワーク定義(インターナショナルデフィニション)の再定義の議論をこのキャンパスから世界に発信しましたが、上の三つは、これにどういう関係があるのかという研究です。

この三つをごく簡単に説明します。もし興味がありましたら、ぜひ、アジア福祉創造センターにお立ち寄りください。喜んで議論したいと思います。今日は、こんなに面白いことをやっているという紹介をするにとどめます。

例えば、仏教とソーシャルワークです。仏教とソーシャルワークは違いますが、ベトナムの先生方は、「仏教がやっていることとソーシャルワークがやっていることは、すごくオーバーラップしているし、似ている。どう違うんだろう」と言います。

ベトナムは、共産革命をやりとげた国ですが、7割がまだ仏教徒だと言っています。お坊さんやお寺は、地域や村で困っている人たちの・・・、「面倒を見る」は言葉が悪いですね。「働く」も悪いですね。何という日本語がいいでしょうか。お坊さんたちやお寺が、そういうことにある種のサーブをしています。活動しているのでしょう。

例として、ベトナム戦争でアメリカがばんばんやったダイオキシンの影響は、今なお深刻に残っています。今は、被害を直接受けた人ではなくて、その次の世代の子どもたちにも問題があります。自分が被害者になった第一世代の被害者は、仕事も得られないので、お寺に身を寄せて、そのお寺から村へ日々通って、そういう子どもたちの面倒を見ているそうです。

尼寺へ行くと、ホームレスの子どももいるし、DV被害者の女性もいるし、HIVの大人や子どももいるし、目が見えなくて何年間もそこに座っている方もいました。

政府は、日本のように立派なエージェンシーを

持っていますが、そちらには行かずに、お寺に来るそうです。また、お寺から政府の施設にリファーしても、帰ってきてしまうそうです。どうしてだろうということです。

ある先生は、ばさっと言いました。「大体、ソーシャルエージェンシーは、職務範囲が決まっているし、勤務時間が決まっているし、『この問題は、こっちだ』とか、『あっちに行け』とか。でも、お寺は、365日24時間、どんな問題でも受けるんだよ。『うちの床下に迷い込んだ野良猫が子どもを3匹産んじゃった。どうしたらいいだろうか』という相談も来るんだよ。それも全部対応するんですよ」。

向こう(ベトナム)からの最初の関心は、こういうふうに来ました。図2をご覧ください。

一番上にあるのがブディズム、宗教です。そして、下には生活ニーズや何かがあります。仏教は、当然、自分たちでいろいろ努力している(A)、経験をもつ人々(people with experience)には、お坊さんも入る。何かをやっている(A)かもしれません。

そして、中央右にあるのが、皆さんや私たちが言っているプロフェッショナル・ソーシャルワークです。もちろん、生活上の問題を(B)で一生懸命やっていますが、この研究の発案の根っこは、もしかしてブディズムがプロフェッショナル・ソーシャルワークに何らかのインプットができれば

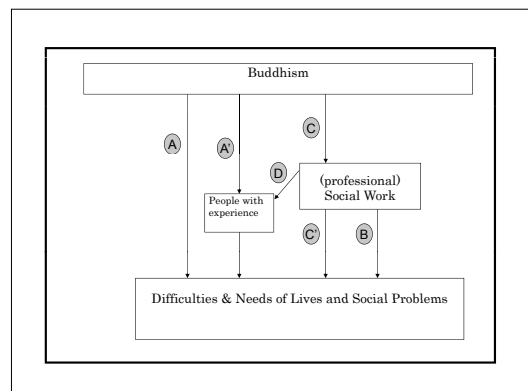


図2 仏教と(プロフェッショナル)ソーシャルワーク

ば③、今あるプロフェッショナル・ソーシャルワークがもっといいものになるかもしれないということです。そういう言葉は使っていませんが、そういうことがあります。それが③です。

そうすれば、より有効な、よりいいサービスができるのではないか。あるいは逆に、自分たち（仏教）が一生懸命やっている実践は、プロフェッショナル・ソーシャルワークからいろんなことを学んでインプットがあれば④、もしかすると、よりいい仏教実践になるのではないか。荒っぽく言えば、こんなプロジェクトです。面白そうではありませんか。

二つ目の「ファンクショナル・オルタナティブ」は、先ほどもちょっと言いましたが、私たちは、「ホワット・イズ・ソーシャルワーク？」と言われれば、「イツ・ア・プロフェッション」と答えます。皆さんも、特に実践の方がいれば、「私たちは専門職よ」と言うと思います。外国でも同じです。欧米でもそうだし、「途上国」でも大概そうです。プロフェッショナル・ソーシャルワーク、プロフェッショナルライゼーションということが、今の向かう方向です。だから、私たちの教育も、私たちのソーシャルワークも、プロフェッショナルライズすることが大事です。

ただ、事はそんなに簡単ではありません。特に、一年生や二年生には、こういう話をしてはいけなと思いますが、今日は研究会なので許してください。世界には200を超える国と地域がありますが、その国と地域で、プロフェッショナル・ソーシャルワーカーがいる国は、いくつあると思いますか。

それは、少しはいるでしょう。しかし、オーストラリアですら、2,200万人の人口に2万人しかいません。1,100人に1人のソーシャルワーカーだと、この間、オーストラリアのソーシャルワーカー連盟の会長が言っていました。

いところも、そんなに手が回るわけではありません。ここに実践家の方がいたら、皆さんのケース労働の重さはどうでしょうか。満足するだけの

サービスができるでしょうか。世界の圧倒的部分にプロフェッショナル・ソーシャルワーカーなどはいません。

しかし、ソーシャルワーカーがいようがいなかろうが、人間の社会であれば、どの社会でも、それ相応の困難、ソーシャルニーズ、プライベートなコンフリクト・ニーズがあるはずです。

では、ソーシャルワーカーがいない社会では、そういう問題は誰がどのように「面倒見ている」対応しているのか。誰も見ていないということはあり得ないと私は思います。社会が成り立つはずがありません。例えば災害でもそうです。昔々から誰かが面倒を見ている。王様かもしれません。人道主義者かもしれません。先ほど言った宗教家かもしれません。今であれば、NGOかもしれません。この間の「3・11」で、日本でも、そういう議論はいっぱいありますが、要するに、コミュニティです。多くの「途上国」に行けば、よりプリミティブな意味でのコミュニティあるいは隣人の支え合いが、そこにあるはずです。

誰かが何かをやっていますが、それは、プロフェッショナル・ソーシャルワーカーがやっている場合とは当然違います。でも、似ています。そのどこがどう違うかをやろうということです。

図3の右側、‘or’の上には何もありません。1人もいないか、‘few’だから、ほとんどいません。これが「マジョリティ・オブ・ソサエティー

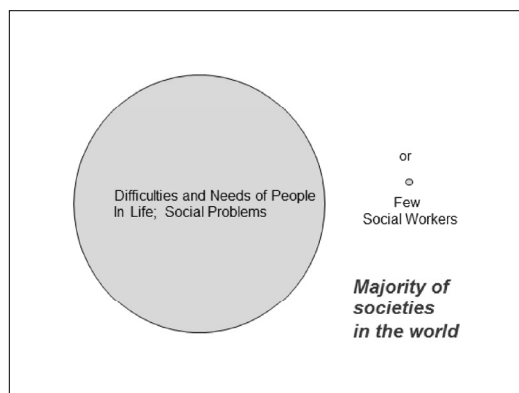


図3 世界におけるプロフェッショナルソーシャルワーカーの存在

ズ・イン・ザ・ワールド」(世界のほとんどの社会)だと思います。しかし、そこには、図の左～中央のような大きい問題があります。

これをどうしたらいいのか。プロフェッショナル・ソーシャルワーカーを養成すればいいというだけでは片付かないかもしれません。間に合わないかもしれません。今日はどうするか。明日はどうするか。来年はどうするか。こういう問題が、今、世界で問題になっています。

このセンターは貧乏なので、私たちは、僅か三つぐらいの国でやろうと思っていました。しかし、あまりにもそういう問題があるから、アジアの大学にちょっと声をかけたら、わーっと出てきてしまって、今、その選択に困っています。

三つ目のプロジェクトは、もっとダイレクトに、アジア地域のソーシャルワークがどう育ってきて、今、どうなっているかという研究です。世界のソーシャルワークの発展は、皆さん、教科書で習います。各国のものも学びます。しかし、真ん中辺り(地域)が全く抜けています。

私は、世界のソーシャルワークの大学連合会の副会長もやっていますが、ここ(地域)がなくて世界のソーシャルワークの実践をやろうといっても無理に決まっています。教育に限っても、僅か一握りのIASSW(国際ソーシャルワーク学校連盟)のグループが、世界にある200の国や地域が困っている問題に手出しや口出しができるはずがありません。そこは、やはり各地域のネットワークがなければ、うまくいくはずはありません。

去年、APASWE「フェーズ1」の歴史研究をしました。そこでわかったことは、宗教ではありませんが、アジアのソーシャルワークは、みんなヨーロッパやアメリカから伝わってきたということです。

では、私たちAPASWEという団体のやってきたことは何だろうか。欧米で育ってきたものは、ネガティブではなく、すごくいいものですが、それをこちらへ持ってくる伝達役をしていたのではありません。悪いことではありません。いいことです。やらなければいけません。だけど、私たちのミッ

ション、やってきたことは、まさにミSSIONナリーではないかと思います。それに逆らって、「これは欧米のものだ」と言う人が時々いるけれども、基本的にはそうです。

それではだめだというのが今です。私たちアジアやアフリカやラテンアメリカのソーシャルワークが本気で自分たちのことを考えて、ソーシャルワークとは何か、どうしなければいけないかを世界に返してあげなければいけません。今までは学ぶのが忙しかったですが、それにお返しをしてあげなければ、世界のソーシャルワークは伸びるはずがないし、世界のものになるはずがありません。それが、この歴史研究の一つのテンタティブなコンクルージョンです。

そして、今は、そのステージ2として、西洋のものがアジアにどのように伝播してきたかを実証しようとしています。もうある程度はわかっていますが、わかっていないこともいっぱいあるでしょう。できたら、これをやりたいということで、今、歩を半歩進めたところです。時間の関係で、これは省略します。

以上の三つのものをなぜやっているのか。ここではソーシャルワークの定義の話はしませんけれども、おとしの11月4日に、IFSW(国際ソーシャルワーカー連盟)とIASSW(国際ソーシャルワーク学校連盟)の作った定義の見なおしをこのキャンパスから世界に発信しました。今のあの定義でいいのか。いけないとすればどこか。いいとすればそれはそれでいい。三つの研究はこれへの貢献です。しかし定義の再検討には、今言った三つでは全然足りません。本当は、ほかにも案はいろいろありますが、いくつかのというか、いっぱいのことをやらなければ、ソーシャルワークの定義はどうだとか、ソーシャルワークとは何かとか、世界のソーシャルワークはどういうものかという議論が本当にできるはずがありません。

おとし、そういうことを行い、去年は、この元学長の大橋先生が実行委員長になり、APC21(第21回アジア・太平洋ソーシャルワーク会議)を早稲田でやりましたが、そこでのシンポジウム

を経て、今、これ（国際定義の再検討）が世界で議論されつつあります。時間の関係で、その面白いところは、はしりますが、今、世界では、これの改定の話が着々と進んでいます。

少々本論からはずれますが、国際定義改訂の議論、ご関心のある方もおられると思いますので少々情報提供をしておきましょう。

今の短期目標は、2012年の年末をめどに、何か決着をつけることです※。IFとIAでやっていますが、ちょっと無理かもしれません。しかし、そういうことで動いています。

ここの定義見直しでどんなことが議論されるかというポイントだけ言うと、例えば、「文化がみんな違うんだから、そんな欧米のやつなんか、役に立つことはないよ」と言ってみたり、あるいは、皆さんも教科書を見てわかるように、「ソーシャルワーク」の定義を作っているくせに、初めからソーシャルワークの定義は書いていません。「ソーシャルワーク・プロフェッション・プロモート」と始まります。だから、上（見出し）に「ソーシャルワークの定義」と書いてあるのに、本文の中は、ソーシャルワーク・プロフェッションの定義を始めています。これでいいのかという議論が、もう一つです。

アジアや「途上国」で、まず出てくるのは、ソーシャルディベロップメントとソーシャルワークの関係、違い、同一性です。また、国家との関係、政府との関係も、「先進」西洋国とは随分違います。中国は、もちろん違います。

あとは、勿論、今のフレームのままで、それぞれの考え、好みにより特定の言葉・概念を入れろ、強調せよといった議論です。たとえば「自立(律)」「マクロ」「市民」「多面性」「インディジナス」。

今、面白い話が出てきています。もしかすると、これは数年後の教科書に入るかもしれません。定義は世界中ばらばらだから、一つにできるはずがありません。でも、作らないと、世界のソーシャ

ルワークになりません。そこで、限りなく短い定義を作ろうということです。今、アジアのあるグループが、世界のソーシャルワークの定義は、3行か5行の短いものにして、アジアやアフリカなどの各地域や各国ごとに、あるいはもっと下でもいいので、それぞれがそれぞれの定義を拡張するとか、敷衍し、自分らのものを自分らで考えるというモデルはどうかと言っています***。

もう一つ、大変な問題があります。これは、あまり議論になっていませんが、歴史研究その他も含めて大変問題なのは・・・仏教の問題でも、一番初めに違いがわかってくるのは・・・仏教や何かは、心の中の問題を言います。無常とか、無とか、愛とか、いろいろなことをやります。

実は、ソーシャルワークの教科書を見ると、一番昔はチャリティーから始まっています。当然、思いやりとか、そういうことです。その次に英語で議論されてきたのがアルトライズム(利他主義)です。

ところが、今のプロフェッショナル・ソーシャルワークの定義の中には、人間の心の問題、内面の問題は一つも入っていません。倫理規定にはあっても、定義には入っていません。これでいいのかという議論です。

すなわち、皆さんが教科書で習う・・・私たちは、社会福祉で、チャリティー・慈善、社会事業を一つ否定し、二つ否定し、戦後社会福祉と習いました。今はどうでしょうか。

しかし、本当にチャリティーの中の何かを全部否定していいのか。そこの内面の何かはなくていいのか。アルトライズムはなくていいのか。それでもソーシャルワークだろうか。「いや、プロフェッショナル・ソーシャルワークは、それでいい。科学的ソーシャルワークは、それでいい」となるのか。これは、そう易しい問題ではありません。こんなことが議論されているとか、あるものはいっぱい、あるものはちょっとだけ議論さ

※ その後のIFSW、IASSW合同定義検討タスクフォースの会議（ストックホルム）では2013年3月原案提示、2014年3月確定との日程が合意された。

※※ 上の会議で合意された。

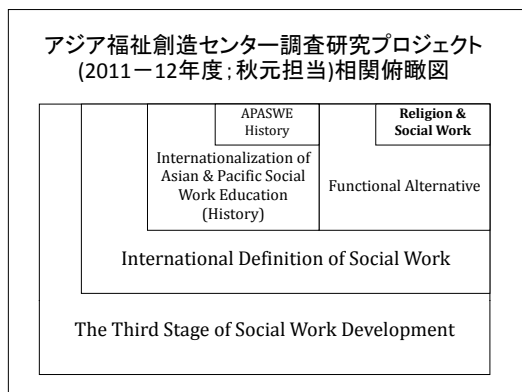


図 4

れています。

以上のことを私は非常に面白がっています。センターは、すごく面白いと思います。研究者の方はもちろん、学生の方も、チャレンジするか、あるいは、どうぞ一緒にプロジェクトに入ってください。歓迎します。

今は、この三つの調査研究をただやっているわけではなくて、図4のような全体像でやっています。四角の右上、ここで、さっきのブディズムのレリジョン・アンド・ソーシャルワークをやっています。これは、全体のファンクショナル・オルタナティブの一つのモデルです。

APASWEという私が代表する団体のヒストリーを去年やりました。その成果に基づいて、アジア太平洋地域全体のソーシャルワーク教育がどのように国際化してきたのか、どのように影響を受けてきたのか、そして、ディセミネーションと言いますか、外から入ってきたときに、普通だと何かモディフィケーションが行われますが、その文化変容があまり行われていないのはどうなっているのかという議論が、四角の中央上部です。

なぜこういうことをやっているかということ、この成果を中央“International Definition Of Social Work”(ソーシャルワークの国際定義)に放り込もうと思っているからです。つまり、ソーシャルワークとは何かということを知りたいのです。こんなちっぽけなことをやっていては話になりませんが、それでも貢献できるだろうと。

それでは、なぜ定義の問題をうるさくがちゃがちゃやるのか。本年度、これから数年もそうかもしれないませんが、ヨーロッパ＝ファーストステージ、ユナイテッドステーツ＝セカンドステージ、そして、サードステージで、ソーシャルワークをまさにグローバルなものか、世界のものにしようと。世界のものになろう、ある意味ではなる、なっていると言うのであれば、実は、図の最下段、この全体がもっと本気で検討されなければ、わかるはずがありません。これが私たちのやっていることです。

ですから、このキャンパスは小さいとは言いながら、できたら、望むらくはインテレクチュアリー（知的）に世界にチャレンジをしていく。教科書を読んでも出てこないかもしれないけれども、もっと本気で考えます。そして、私たちは、2階、3階（前掲図1）を作ったのですから、中だけではなくて外にチャレンジしていけたら、社会事業大学は世界のトップです。

このセンターがそういうことに少しでも貢献できたらと、今、よちよちと歩みを始めたところです。皆様の関心とサポートをいただけたら大変うれしく思います。本人たちは、楽しくてしょうがないと思ってやっているので、ぜひ一緒に研究を進めたいと思います。ありがとうございました。

古屋 秋元先生、ありがとうございました。大変興味深い、非常にグローバルな話を展開していただきましたが、学生の皆さんに、とてもわかりやすく伝えていただいたことをとても感謝します。

個人的には、確かに、仏教徒のお寺の方々が24時間365日どんな問題にも対応していることを改めて考えれば、プロフェッショナル・ソーシャルワークは何をやっているのだろうということをすごく感じ入りました。

時間が少しあるようなので、もし会場から質問などがありましたら答えていただきたいと思います。ですが、いかがですか。よろしいでしょうか。

藤岡 研究所長をしている藤岡（孝志）です。すばらしいプレゼンテーションでした。まず、簡略に紹介していただいて、それから、今進んでいる

共同研究について面白く話していただいたことを心から感謝しています。

研究所としては、アジア福祉創造センターの研究仲間をぜひ広げていきたいと考えています。この学内学会は、その非常に貴重な機会だと思っています。そういうことで、事務局長の古屋先生にお願いして、秋元先生にぜひ話していただこうということで実現しました。

学生の皆さんも、研究と一緒にやっていこうという方々も、ぜひ研究所に申し出てください。これから一緒にやっていただければと思います。どうぞよろしくお願いします。ありがとうございました。

古屋 ありがとうございました。それでは、秋元樹先生、本日は誠にありがとうございました。皆さん、もう一度拍手をお願いします。

認知症者の生活支援に必要な「介護の手間」判定指標とは ～平成22年、23年度老人保健事業推進等補助金事業から～



今 井 幸 充

古屋 それでは、教員研究報告の第2題目ですが、専門職大学院教授の今井幸充先生にお願いしました。今井先生は、ご存じのとおり、(日本)認知症ケア学会、日本老年精神医学会、日本老年社会科学会など、いくつもの学会で要職を務めておられ、今現在も臨床の精神科医師です。

本日は、「認知症者の生活支援に必要な『介護の手間』判定指標とは～平成22年、23年度老人保健事業推進等補助金事業から～」ということで、研究の報告をお願いしました。受付ロビーで、その研究班の報告書も配布しています。それでは、今井幸充先生、よろしくお願いします。

今井 事務局長、ご紹介ありがとうございます。皆さん、こんにちは。このようなフォーラムで話すことができ、大変光栄に思っています。

先ほどの秋元先生の内容とはだいぶ異なり、皆さんにとっては非常にマニアックな問題です。認知症に関しては、あまり専門でない方もいると思いますが、今日、ここで私が発表するのは、内容はともかくとして……。このように、ちょっと高いところから皆さんを拝見すると、将来、研究をする、いわゆる若手の研究者、あるいは学生や院生がいます。そこで、研究とはどういうものかということも踏まえて、認知症の尺度開発という

視点だけではなくて、皆さんのこれからの研究に、何らかの方向性で役立ててもらえればと思っています。

私は、ここに2000年に就任しました。その前は、聖マリアンナ医科大学で教鞭を執って研究をしていたわけですが、私が認知症の研究を始めたのは、正式に言うと、1980年からです。この研究を約30年以上続けてきました。今、こうやって年を取って振り返ってみると、なぜこのように続けられるのか、そのパワーは何かということを私自身も不思議に思っている次第です。

そもそも私が研究を始めたのは、博士号を取るために、認知症、アルツハイマー病の診断の評価の問題で、CTスキャンを使って評価方法を開発したのが最初でした。

CTスキャンは、今はどこでも使われているわけですが、当時は、持っている施設は少なかったです。アルツハイマー病特有の脳委縮をどうやって評価するのかということを、「エビデンスをもって」とよく言いますが、きちんとした証拠をもって評価していく方法を開発して博士号を取りました。

私たちの研究は、あくまでも、その結果、アウトカムが実践にどう活用されていくかが非常に大